



奏迷宮

司修

ESKASIA
OSAMU

苏工业学院图书馆
藏书章

奏迷宮

奏迷宮
そうめいきゆう

一九九一年三月一日 初版印刷
一九九一年三月八日 初版発行

著 者 司 修

装 幀 菊地信義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 三四〇四―一二〇一（営業）
三四〇四―八六一一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

©1991 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-309-00672-8

目次

烏 と 狐	奏 迷 宮	雲 火 霧	尿 糞 所
-------------	-------------	-------------	-------------

143

95

37

5

奏 迷 宮

屎^し
糞^{ふん}
所^{しょ}

鳥は、季刊で刊行されている『仏教』という雑誌に、地獄を主題にして随筆を書いた。特に仏教と関係があるからというわけではない。書きたいこともないので、何の気なしに眺めていた画集が、たまたま『地獄草紙』であつたのだ。その絵の感想でも書くつもりで始めたのに、自分の生活がいかに地獄めいているので、それもとりまぜて書いていくうちに、ああ、これを小説にしてみたら面白いなと思いつき、さっそく、随筆の一行目から書き加えたのである。浅薄なのは承知の上だ。

編集者である友人の一人が、才能の無いものが努力して書く小説ほどつまらないものはないと、鳥へのさげすみを込めて親切そうにいったことがあつた。それが、彼の耳の底にどろりとたまつていたので、この程度がちょうどいいのではないか、とも思つたのである。

鳥は、三流の絵かきで、小説はまだ書き始めたばかりである。近所に住む親しい小説家からは、小説など書かずに、絵を描いてほしいといわれ、鳥はしゅんとしてしおらしく、絵の世界のいい

ところをいろいろ考えてみて、その道に戻る決心をした。小説なんか止めたと、固く固く決心した。それなのに書くことに没頭させられてしまうのである。意志薄弱、思考混沌、明き盲、いいかげんな性分が勝ってしまうのである。

だが、いちがいに彼を責められないこともある。百科辞典のような大袈裟な画家名鑑を見ると、一号数百万円なんて馬鹿げた値段の画家から、小さい新聞活字の名前だけの画家まで、画家と称する人間は何百万人もいる。ほんとうに何百万人もいるのかと、作家の〇さんから訊かれ、その位はいるでしょうと答えたら、〇さんは、何百万人というと、少なく見積つても、人口一億の一割近くいることになるが、と迫られて、烏は、ちよつと大袈裟であつたかと反省をしたのだつたが、絵を描きさえすれば誰だって絵かきになれるわけである。素人も玄人もない。美術は、名をなした老画家を、幼児の自由奔放な絵が負かしてしまうこともありうる。また、山下清ガハクのごとく、絵画的感覚だけが伸び育つて、日常生活は普通に出来ないという例もある。また、病気で、左脳を完全に破壊されてしまった絵かきが、現実の人間関係を一切失つてもなお、意識を失う以前の仕事より緊張感溢れる絵画を制作している、ということもある。絵画は、その誕生から、描くことの経験より、何を描くかを思考する経験が、見るものの心を刺激して感動を与えてきた。人間が描いた最初の絵画であるというラスコーやアルタミラなどの洞窟壁画や、アフリカの自然石に描かれた原始的な絵画は、それを物語っている。

「俺はそう思うね」

と鳥は、自分を納得させるために、鏡の中の自分の顔を睨めつけながらいった。

しかし、どの画家名鑑も、値段順に名前が並んでいる。が、作品の質となると、小さな名前だけの画家の方が良い場合が多いのである。が、やっぱり金^{カネ}がすべてを決定する世の中においては、名前順に偉いのである。

鳥はというと、ときに、君、君の値段は号百万円だちゅうじゃないの、と友人に軽蔑を込めていわれて驚き、その名鑑を見せたらうと確かにそう印刷されている。びっくりして前の頁をめくり、大家の値段を見ると、号数億円である。それでは彼の絵が百万円であつても不思議はない。0^{ゼロ}が二つ三つ多い、そんないいかげんな本が出版されているのである。

そのような名鑑を持つて商売している人もいると聞く。地方に行けば印刷物は信用される。この先生の絵はこれこれだが、十分の一に負けるときましようというのだそうである。これが芸術を売る方法と聞いて尻込みするようでは、一人前の芸術家にはなれない。しかしなんといつても、絵画の価値を一般大衆に分かつてもらうには、それがいくらであるかが一番であることは確かだ。ゴッホが何億円で買われた、ミレーが何億円だと、新聞に紹介される美術記事は、目の玉が飛び出るような金額と不遇な画家の名前だけ。それが証拠に、山梨の美術館のミレー。億^{オウ}ションで買入れた評判が人を呼んで、入場料だけで黒字だと聞く。地方自治体がやつきになってうん億円^{オウ}の美術品を買ひあさり、偽物を掴まされる事件まで出てきた。売れない絵かきの絵を、絵の具代ぐらいで買ひ入れてやれば、どんなに救われるかと思うが、自治体も国もそんな馬鹿なことは

しない。芸術などからきし信じてなんかいないのだから。やはり、金額によってしか理解してないのである。

新聞の美術記事は、政治や社会面のように、出来事を曲げることなく伝えるという性格と少し違うので、首になることがない終身記者が、一般的には影響力のある美術評論家として、お経のように分らない文章をお書きになる。「大波小波」というすぐれたコラムがあるので有名な新聞の美術欄はその代表格である。「大波小波」は匿名で酷評をなさっていて、鳥も二、三度おちよくられたことがあるので、その新聞の美術欄が、古物商であることぐらいいわせてもらっても、罰は当たるまいと思っているのである。その美術記者は、修道士のごときをもつて定評あるらしいが、自分の信じている神以外のなものかについては、無視という真綿で首を絞めるような残虐な方法を身につけていらつしやる。彼にとつての無視はスカンクの屁のような役目を果たすのであるが、無視されたものが無視で返しても、屁をひっかけ返したことはない。そのへんのメカニズムも御存じの上でやっているのだから始末が悪い。記事を読むと、さりげなく大家のお名前がたくさん使われ、また、スカンク氏好みの大岩のごとき作品をとり上げられ、そのような制作態度を持たぬ画家は絵を描く資格がないような表現もみられる。鳥は、石頭を定年まで使つて書かせる新聞社の態度も疑るのである。読者は新聞記事を信じて展覧会を見に行き、購入することも起こる。美術ジャーナリズムが衰退している今日は特にそうなる。今度のあなたの展覧会評判がいいですねといわれる理由は、どの新聞に批評が書かれていたということからいわ

れるくらいである。そうでない場合もあるが、僅かだ。スカンク氏も、新聞記者としてではなく、美術評論家として雑誌でやっている分にはかまわないのであるが。

美術雑誌についても少しふれておこう。良心的な美術雑誌は読者を失って廃刊になったり、編集方針を変えて生き残っているものもある。しかし、若者を引っ張っていく強烈なニユースが世界的に枯渇しているの、読者をひきずりこむのは大変なようである。だが、最先端をめざそうとさえしなければ、カルチャーセンターブームに乗って、美術も売れゆきのいい銘柄らしいのである。

美術界にはもう一つの顔を持った雑誌がある。団体展、個展などが始まると、必ず電話がくるのである。一つの例を紹介しよう。あなたは、うちの雑誌の編集部において優秀作家として選出されました。つきましてはカラーページで御紹介したいと思います。この話し方は、あくまでもいわんとすることを隠して、相手が乗っかってくると本音を出す、なになにに投資をとか、お買い得なマンションをとか、怪しげな商売をする者に共通した気味悪さがある。だから、えつ、どこの出版社？ と大きな声で聞き返す。すると、良心的な出版社と紛らわしい〇〇美術出版ですといい、先生の御出身はとか、こんどの出品作は大変素晴らしいのだの、ぐずぐずと喋りまくり、タイトルを後で変更したのも知らずに、しゃあしゃあと××はどういう意味があるのでしょうか、などとへりくだり、十分も喋ってからさりと、一頁二十万円ですが、優秀作家として推薦されましたので何頁でも特集しましょう、とくるのである。いや、けっこう、というとまたぐずぐず

と喋り出す。しつこいので腹を立て、いらんといったらいらん！ とやり、受話器を置いてしまふ。するとすぐにまたベルが鳴り、チャンスですのとくる。うるさい！ と電話を切る。その夜、無言電話が何回となくかかってきて、二日後には、テレビショッピングでお買い上げ頂いた電気冷蔵庫とステレオセットです、なんて、大型トラックがやってくる。ただでもいらぬものだから、運転手を怒らせないようになだめすかして帰ってもらったことがある。美術ゴロの仕業に違いないが、証拠がない。腹の立て損である。そのように悪質なのは一部であるが、とにかく、良質なごく一部を除いて、美術雑誌は壊滅状態であることは確かかなうだ。

そのようなことを、彼なりに考えたり発言したりしているので、烏は、絵かきの仲間から、あいつはもう絵は描けない、絵かきというより五流のジャーナリストだと、クソミソな言葉を浴びせられ、彼らが得意の足引きを始めたのである。五流の五の字の下に口をつければ吾流ではないかと、烏はうそぶくが、気は沈む。

悪意に満ちた友情！

昔から、純粹美術家は、出版に関する仕事をしている者を輕蔑する傾向がある。それなのに学校の先生をしていることは当り前と思われている。さし絵など描いていようものなら、あんなものは器用でなければ出来なと思われ、器用ゆえに低級であるといわれるのである。自分より目立ったら執拗に悪口をくりかえし、古い貝殻に押し込めたくなる習性を持っているらしい。文章などを書く、同じく、美術家に不必要なものとされ、陰口をきかれる。そのくせそういうやつ

らは、批評が小さく新聞に載ったぐらいでお祭り騒ぎをするのである。もうこうなったら、憎まれっ子になるしかない、烏は、体を大きく揺すって大見得を切るしぐさをした。

この素晴らしい世界に、ゆつくりと身を沈め、じつくりと仕事をしよう。そう思いこんだ人間を主人公に書けば、かなり幻想的になる、と烏は思った。じつは、幻想小説を書く約束しているのだが、彼の頭には幻想のげの字も浮かばず、悩んでいたのである。何処へ行くのかふりふり、行き先知らずの盲滅法。

何年か前まで、烏は家を出て、新宿番衆町の、歯科医院の三階にあるマンションに住んでいた。せまいベランダに太った新宿ガラスが何羽もとまりにやってくる。烏は、本物のガラスに似ているところがあるのでそれが嬉しい。彼は、前のめりにせわしく足を出し、つつつびょんぴょんといった歩き方をする。黒ずくめの服装を一年中しているのは、ガラスを意識してのことで、歳を取るにしたがつてガラスらしく振舞うのをめざした。ガラスの鳴き声、彼らの会話、恋愛、なども、彼はガラスになりきるために、ローレンツの本などを読んで研究したほどである。それゆえに、そこは居心地がよかった。

家を出る前、烏は、酒ばかり飲んで、酔ってはもろもろの不満を妻にぶつけていた。そういうときにこそガラスになれば、人間世界のくだらぬ関係から逃れられるのに、修業の足りないものの悲哀で、より人間的に狂いまくるのだった。そんなぐあいで、妻の方から別れたいといいだ

し、中学生の娘には愛想をつかされ、烏はなおさらに、まるで『ヴィヨンの妻』の詩人のように飲んだくれるのだった。そうやって二日酔いの頭を抱えて家にいると、不安と、不快な思いばかりがして仕事も出来ず、（自分が悪くても、妻が悪いからこうなつたと重大に深く思いつつ）いつそ家を出て、一人孤独を味わいながら、おちついて仕事をしようと決心してのことである。

六畳一間の事務所は、独身の氣分を盛り上げ、近くの喫茶店で仕事の打合せをしていると、こんなに心安まる世界があつたのかと思ひ、陽が暮れると、若者が行き交うコマ劇場の周辺をうろつき、誰にも相手にされない少年を見つけて、自分の少年時代を思い出し、なんにもやってこないのが分かつていても、じっと待っていることの楽しさが体に満ちていた不思議な体験が甦るのだった。

今は何処をほじくつてもそんなものは味わえない。そう思うと寂しいが、惚けている少年を見ているだけで、心が和む。そうして、毎晩、おちついて飲むようになり、数軒の飲み屋を梯子して、朝日を拝みながら、這つても行ける距離のマンションへ、釣針にかかったぼろ布のようになつて帰るのが日課になつてしまった。烏は、そのつど、こいつは地獄への階段を下り始めた、と思うのだった。

彼の酒は、飲んで愉快になる酒ではなく、酔えば酔うほど不満がもりもりと膨らんで、何を見ても不快になるというタイプである。初めから氣に食わないという思いがあるから、脇で飲んでいる連中が、楽しそうであるだけでたちまちわけわからぬ大不満が噴出するのである。